

東京工大クロニクル

Tokyo Institute of Technology Chronicle

No. 180

June 1985

主要記事

工業材料研究所 創立50周年記念行事……………	1
UNESCO大学院研修 生の研修旅行……………	3
各種委員会委員名簿……………	6

工業材料研究所創立50周年記念行事



工業材料研究所創立50周年を祝う記念行事が、3月23日(土)に多数の来賓をお迎えして、盛大に開催された。

午前中の研究室公開に引き続いて総合研究館において行われた記念講演会では、研究所の最近の研究成果の一端の紹介として、「固体電解質ガスセンサー(斎藤安俊教授)」、「炭素繊維/炭素複合材料について(木村脩七教授)」、「高強度プレストレストコンクリートくいの耐震性能向上について(黒正清治教授)」、「セラミックスにおける水熱プロセス(宗宮重行教授)」と題してそれぞれ講演が行われた。

記念式典では、浜野健也所長の式辞に続き、松田武彦学長、松永光文部大臣代理、元学長・元工業材料研究所長山内俊吉名誉教授、同加藤六美名誉教授から御祝辞を戴いた。国内外からの祝電50通以上の

一部の披露後、白井實事務局長の御紹介によりお招きした、東京芸術大学音楽学部増淵任一朗助教授をはじめ邦学専攻の方々により、祝賀の箏曲「絲竹風韻」の演奏があり、記念式典に壮重さと共に華かさを添えた。

その後、食堂に会場を移して祝賀会が行われた。席上、前学長・元所長斎藤進六名誉教授、蔵前工業会理事長代理中山一郎氏などから御挨拶を戴いた。

当日は多数の名誉教授の先生方をはじめ、同窓生、旧職員の方々も参加され、あちこちに歓談の花がさいた。なお当日の参加者は、文部省関係3名、他大学附置研究所長等6名、名誉教授12名、学内教職員49名、旧職員・卒業生・企業関係者及び所内関係者等約180名の計約250名であった。

所 長 式 辞

工業材料研究所長 浜野 健也



本日は、東京工業大学附置の工業材料研究所の創立50周年を祝う式典に、文部大臣の代理として学術国際局の佐藤研究機関課長殿をはじめ、公私御多忙の折にもかかわらず多数の方々が御列席下さいましたこと、誠に有難く御礼申し上げます。

工業材料研究所は、関東大震災の大きな災害によって建築材料の研究の必要性が理解され、昭和9年3月1日に本学に初めて附置された建築材料研究所と、産業上重要な材料でありながら、高温を使用するため不明解な点が多くその基礎科学の確立が要望されていた、窯業の研究を行う目的で昭和18年1月30日に設置された窯業研究所とが、研究面の重複を避け、研究態勢を強化するために統合し、昭和33年3月31日に再発足したものであります。

統合時には、不完全部門を含む5部門の小研究所でしたが、時代の要請に応えるべく順次部門の増設を行い、昭和43年には8部門の構成となりました。しかし、その頃から世界的に材料研究の重要性が認識され、海外において活発に研究・教育組織の強化が進められるようになってきたため、このままでは世界の趨勢に遅れるということで、工材研でも研究態勢を強化するための長期計画を策定し、その実現方を関係方面に要請して参りました。

その後、工材研に初めての附属施設として、水熱合成材料の実験施設が8年の時限付きで認められ、さらに55年、56年度には研究態勢の一層の効率化・流動化をはかるため、先に策定した長期計画を骨子として大部門への転換を行い、同時に研究分野の増設も認められました。その後水熱合成材料実験施設が、時限のため58年度末で廃止となりましたが、その研究成果の一部を核として、さらにそれを発展させるため、59年度には新素材セラミックス実験施設

の新設が認められ、現在、材料基礎、材料プロセス及び防災材料開発の3大部門、客員1部門相当を含めて12部門相当に1実験施設を持つ研究態勢を整えることができました。この間昭和54年夏には、大岡山から現在の長津田キャンパスの新しい建物に移転し、さらにこの程、工材研の西隣に完成した合同棟内にも研究スペースを確保できるなど、この面からも研究態勢を整えつつあります。

研究の面では、初期には田辺平学先生、後藤一男先生を中心とした「組立鉄筋コンクリート住宅や工場生産建築の研究」によって、今日のプレファブ不燃建築のもとを開き、また、山内俊吉先生、河嶋千尋先生を中心とした「ジンターコロンド」や「サーメット」の研究などが、今日ブームとなっているファインセラミックスの発端となっているなど、常に工業材料分野の研究の先端にあってそれを支えてきたと自負いたしております。

もっとも、現状でもいくつか問題もないわけではありませんが、しかし、この50年を振り返ってみますと、戦前から戦時中の厳しい統制時代、戦後の物資の不足時代、そして拡大成長の時代に突然起った石油ショック、それに続く不況、国家財政緊縮の時代と、度重なる厳しい時代を経ながらこのように拡大・成長し、創立50年の記念すべき時を迎えることができましたことは、諸先輩や多くの関係者の方々の御尽力・御支援のお陰と心から感謝申し上げます。同時に、今日新材料の開発が非常に注目され、期待されている時代に、このような節目の時を所員として迎えることができましたことは、誠に有難く意義深いものと考え、所員一同、ますます研究・教育に精進いたしますと共に、工業材料研究所の名前にふさわしい研究態勢作りにも引き続き努力を続ける所存でございますので、今後共なお一層の御支援と御配慮をお願い申し上げます。

終りに、重ねて、50周年の記念式典に御参会下さり、我々を励まし喜びを共にして下さいました皆様方に、心から御礼申し上げます。



UNESCO大学院研修生の研修旅行

大瀧 仁志

毎年恒例になっている5月のUNESCO大学院研修生の研修旅行は、京都の葵祭の時期をはさんで、工場見学、日本風物の見学などを主題に、今年も5月14日から18日にわたって実施された。

14日の雨もようの朝、東京駅には研修生およびその家族ならびに引率者総勢24名が集合した。今年は珍らしく3人のちびっこも含まれており、なかなかにぎやかであった。

新幹線ひかり号は正午すぎに京都駅に着き、ロッカーに荷物を置くと、さっそく一同はサントリー生物医学研究所と桂醸造所の見学に出かけた。研究所は山崎から少し入った大阪府三島郡島本町にあり、生物学ならびに医学に関連した基礎的研究を行っている。本学理学部OBの石黒正路氏（池川研）が案内して下さった。スライドによる研究所の説明のあと所内をめぐり各研究室を見学したが、400MHzのNMR、ガスクロマト分取質量分析計をはじめとする各種の測定機器、カラー・ディスプレイのできるコンピューターなど、研修生には垂涎の的の装置が沢山あり、数100名の研究者が活発に研究していた。所長の中西香爾氏は現在アメリカ、コロンビア大学の教授で、名古屋大学では私の先輩に当り、世界的にも有名な天然物化学の研究者である。折あしくこの時は不在であったが、年に4回ほどアメリカから来日し研究の指導に当たっている由である。

研究所の見学がすむと車にのり、少し離れた桂醸造所にビールの生産を見に行った。ここは見学者が多く、バスで訪れる人が沢山いた。大きな貯蔵所や塔が並び、銀色の光をにぶく反射していた。

案内係の安西嬢によるスライドを用いた工場全体の説明をきいたあと、同嬢の案内で醸造所の中を製造過程に沿って歩いた。ビールが濁った色で醗酵している醗酵塔、層になって見える沈降塔、部屋中が0℃に保たれている保存室、流れるようなボトリング過程を見て、最後はお待ち兼ねの製品の味見である。安西嬢にははじめての外国人のお客様であったようだが、なかなか上手な英語で案内して下さり、研修生にも大人気であった。

再び京都駅まで引きかえし、荷物をとり出して、宿舎に入った。夜は京都の街に出て商店に並ぶ京都

独特の土産物などを眺めながら散策をした。

翌朝は御所に出かけて葵祭の行列を見物し、午後からは島津製作所三条工場を訪れた。ここでは貿易部の平山氏の上手な英語と親切な接待にあずかり、一同大いに満足した。分析センターにはズラリと分析用大型機器が並び、見学と同時に実習などもできるようになっていた。実際に何人もの人々がデータを取っており、研修生はここでも再び日本の化学測定装置の見事さに接し、“Japan is great!”と驚嘆した。

カタログやパンフレットを望む研修生が多かったが、平山氏は一人ひとりの要望に沿うよう配慮して下さった。また帰りは宿舎まで車を手配して下さり、大人数の見学グループは大いに助かった。



島津製作所三条工場分析センターで平山氏（右端）の説明を受けるUNESCO大学院研修生

宿舎に入ったあとは夕食をとり三々五々街に出かけたが、われわれは数人の研修生にさそわれて案内係も兼ねて一緒に外出し、三条・四条河原町、祇園、八坂神社、先斗町、高瀬川沿いなど、京都の夜の名所を一まわりした。丁度うまく舞妓さんに出くわし、並んで写真を撮る者もいた。古いのれんの居酒屋で日本の酒と日本風のつまみを楽しんで、しばし日本情緒に浸っていると、突然隣の席の中年男性からビールをごちそうになり、研修生とはあまり言葉が通じないまま、大いに国際親善を深める一幕もあった。

16日の午前は観光バスで市内の名所を見学した。観光バスは東本願寺、二条城西の丸、金閣寺とまわった。これらのいずれの場所も研修生の眼を奪うもので、「京都はすばらしい」と大好評で、「東京よりも京都が好き」というのが何人もの研修生の感想で

あった。これは東京ではきびしい研修生活、京都では楽しい見学旅行という相違も大いに関連しての感想であろうと推察した。

昼食のあと、近鉄で京都から奈良へ向った。奈良ではわずかな時間しかなく、十分な見学はできなかったが、それでもいそぎ足で東大寺の大仏を見ることができた。奈良公園では餌をやると沢山の鹿が寄ってきて、彼らにはまことに珍しいものであったようだ。

わずか2時間ほどの短時間で奈良をあとにし、大阪に出た。その夜は新大阪駅に近い宿舎に泊った。

翌朝は大阪城に出かけ、コンクリート製ではあるが偉大な大阪城に敬意を表した。



大阪城の前で一同揃って

韓国から来たShinさんとその家族（奥さんと小さな2人の子供）はここから東京に引きかえしたが、残りの全員はさらに足を伸ばし、広島に向うことにした。インドのSrivastava君と夫人ははじめはここから帰京するつもりでいたが、広島の実験記念館やドームの話の聞くと予定を変更して同行することになった。

17日の昼すぎに新大阪駅を発って3時すぎに広島駅につき、駅からほど近いホテルにチェック・インし荷物を置くと、休む間もなく平和公園に出かけた。駅前から市電に乗ると、東京では見られない路面電車に「新幹線より面白い」と彼らは大いに気にいった。途中から乗ってきたお客さん達ともたちまち仲よしになり、習った日本語を懸命に駆使して何とか意思の疎通をはかった。

市電は原爆ドームの前で停り、一同は40年前の一発の爆撃の跡を驚きと、いささかの好奇の眼で見上げた。

川を横切り、平和の塔、平和の火、慰霊碑を見たあと原爆記念館に入った。丁度修学旅行シーズンで、記念館は高校生であふれていたが、一同もその中に

混じって遺品や写真をみてまわった。

外に出てふとみまわすと、何人かの研修生が慰霊碑の前に並んでいる。近寄ってみると、彼らは原爆で亡くなった人の霊に黙禱を捧げていたのである。原爆の展示をみて大いに胸を打たれ、言葉もなく、ある者は本当に涙を流して霊をとむらっていたのである。

言葉もちがいがいい、時代もちがう人々の胸にこれほど強い印象を与えたものは京都の美しさでも奈良の古さでもなく、破れ、ただれた人々の姿であり、こわされた建物の跡であった。二度と戦争はしたくない、再び原爆はあってはならないという教えは、何も語らずとも広島を訪れたすべての人々に理解でき、また深い感動を引き起すものである。Srivastava夫妻は頬に伝う涙を拭いながら、広島にすべての人が来るべきだと云った。こういう言葉こそUNESCOの本来の精神に合致したものであろう。日本人にはむしろ日常的になって、もしかしたら案外忘れかけている広島を、異国の彼らは強く強く認識したのであった。

あまりの強い感銘に、しばらくは誰も口をきかず、黙って歩いていたが、「このままではとても帰れない。気分を換えましょう」ということで、川に浮ぶボートをこぎ少し快活さをとりもどし、それから広島の夕闇せまる街を散策し、夕食をすませ、宿舎に帰る人、さらに広島の夜を楽しむ人に分散した。

翌朝は電車と船で宮島に渡った。快晴の空の下、厳島神社は潮の中に鳥居が浮び、まさに絶景であった。丁度雅楽と舞が国宝の舞台の上で行われており、古式ゆかしい音楽と踊を観賞することができた。

「あのコスチュームは印度のものと全く同じだ」と印度からの研修生の声があがった。伝統的な日本古来の衣装（厳島神社は神仏混淆）が実は印度からの輸入品であるのはなかなか国際的で愉快である。

丁度東京工業大学を訪問した中国人化学者の一行と厳島神社の境内で出会った。中国からの研修生であるDonさんとBaoさんは彼らと仲よく中国語で語り合い、しばらくの間同行した。

ロープウエーのところで中国人一行と別れ、われわれは^{みせん}弥山の頂上まで登ることにした。長いロープウエーは多くの研修生にはなかなか珍しいもののようであった。

帰京時刻があまり遅くならないように時間をみはからい、広島駅までひきかえし、それぞれ新幹線に乗り込み、研修旅行もようやく終結を迎えた。

事務局の沖松氏は始終にこにこと一同を導き、み

んなから「Oki-san」,「Oki-san」と親しまれ、ときには「Mr. Let's go」,「Mr. Let's enjoy」などと彼の口ぐせがニックネームとして奉つられた。20人以上もの各国からの外国人の団体をつつがなく数日間旅行させることは並み大抵の心労ではないが、沖松氏に同行した若森さんも実によく彼らの面倒をみて下さった。これでは研修生もenjoyするはずである。日本の最新技術、美しい風物、そして戦火の跡と盛沢山の内容をもつ旅行であり、彼らにとっても恐らく終生忘れることのできない思い出となったものであろう。

う。

葵祭も面白く、奈良の大仏もいいが、日本のもっとも重要なもののひとつである原爆の跡を訪れることはUNESCO研修生にとって極めて貴重な体験であり、彼らの言葉にもあったように、これからも広島訪問はUNESCO研修旅行には欠くべからざる場所とすべきではなかろうか。

(大学院総合理工学研究科 教授
UNESCO大学院コース主任)

精密工学研究所シンポジウム概要

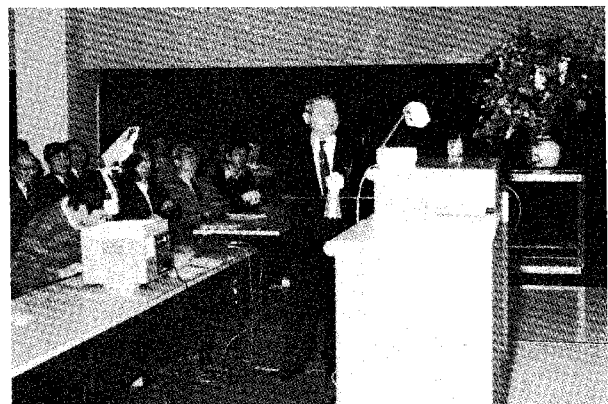
第11回精密工学研究所シンポジウム「強力超音波及び動力的圧電体応用」が去る2月25日、長津田キャンパス総合研究館で開催された。

奥島基良教授を実行委員長とし、シンポジウムのテーマの選定にあたっては、

- (1) 森栄司教授の最終講義を特別講演の形で含めること
- (2) 強力超音波を化学反応に応用して成功した例
- (3) 精密加工においてミクロンからサブミクロンの位置決めが課題になっている現在、圧電体の動力的応用として圧電体アクチュエータを含むこと
- (4) 難加工性材料の精密加工を可能にする振動切削を含むこと等を狙いとして「強力超音波及び動力的圧電体応用」が決められ、下記のようなプログラム(敬称略)が組まれた。

1. 最近の圧電材料 (東工大工学部) 内野研二
 2. 圧電材料と強力超音波用振動子
(日本特殊陶業) 坂野久失, 大矢寛二
 3. 超音波振動切削の現状と課題
(宇都宮大工学部) 隈部淳一郎
 4. 化学反応における超音波の利用
(東工大工学部) 石川延男
 5. 新しい超音波霧化法および超音波モータ
(東工大精研) 上羽貞行
 6. 圧電体を用いたマイクロメカニズムおよびアクチュエータ (東工大精研) 林 輝
 7. 強力超音波工学の確立をめざして
(東工大精研) 森 栄司
- 講演はOHP, VTR, 実演ありで、打ち解けた雰囲気

で行なわれ、参加者の方に十分満足して頂けたのではないかと虫のいい推察をしている。また最終講義の時間を十分とってあったのに、森教授としては予想外に短時間で講義を終えられ司会者が少し慌てる一幕もあった。



最終講義

参加者は総計 204 名 (学内100名, 学外104名) にのぼり、実吉純一元学長、中田孝名誉教授も元気な姿を見せられ熱心に質疑されておられた。シンポジウム終了後懇親会が行なわれたが、こちらのほうも100名余りの参加者があり盛会であった。

シンポジウムを盛り上げて下さった参加者の皆さん、快く講師を引き受けて下さった先生方、裏方で御協力下さった皆さんに実行委員のひとりとして深く感謝致します。

なお、興味をお持ちの方は予稿集が精密工学研究所事務室にありますので御利用下さい。

(精密工学研究所助教授 上羽貞行記)

各種委員会委員名簿

(昭和60年6月現在)

学内規則に基づく各種委員会委員名簿を掲載します。(掲載順不同)

(◎委員長 ○副委員長)

評議会

学	長	松田 武彦
理 学 部	長	田中 郁三
理 学 部		小口 武彦
		本間 龍雄
工 学 部	長	清水 二郎
工 学 部		石川 延男
		竹中 俊夫
大学院総合理工学研究科長		田中 良平
大学院総合理工学研究科		岸 源也
		明島 高司
資源化学研究所長		伊香輪恒男
精密工学研究所長		吉本 勇
工業材料研究所長		浜野 健也
原子炉工学研究所長		福富 博
附属図書館長		早川宗八郎
教 務 部	長	吉見 吉昭
事 務 局	長	白井 實

部局長会議

学	長	松田 武彦
理 学 部	長	田中 郁三
工 学 部	長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長		田中 良平
資源化学研究所長		伊香輪恒男
精密工学研究所長		吉本 勇
工業材料研究所長		浜野 健也
原子炉工学研究所長		福富 博
附属図書館長		早川宗八郎
総合情報処理センター長		池邊 潤
教 務 部	長	吉見 吉昭
事 務 局	長	白井 實

教育委員会

理 学 部	藤原 大輔
	小林 宏
	◎磯 親
工 学 部	◎坂本 宗仙
	小泉 堯
	後藤 尚久
	熊田 禎宣
	山本 経二
	今田 高俊
大学院総合理工学研究科	木田 拓郎
資源化学研究所	山本 明夫
精密工学研究所	中野 和夫
工業材料研究所	齋藤 安俊
原子炉工学研究所	佐藤 伸
共通科目	森 雄次
	繁樹 算男
	吉田 弘
理学部専門教務委員会主査	高橋 渉
工学部専門教務会議主査	加藤 誠軌
類 連 絡 会 議	山中 健生
教 務 部 長	吉見 吉昭
幹 事	教務部次長
	教 務 課 長
	理学部事務長
	工学部事務長
	総理工等事務部長
	同 教務課長

大学院委員会

理 工 学 研 究 科	大沼 甫
	阿部 光雄
	小林孝次郎
	菊池 實
	飯島 俊郎
	長谷川健介
	柳澤 健
	熊田 禎宣
総合理工学研究科	◎新井 栄一
	大瀧 仁志
	佐藤 拓宋
	森 勉
	◎古川静二郎
	丹生慶四郎
人 社 群	今野 浩
外 国 語 群	中山 真彦
教 務 部 長	吉見 吉昭
幹 事	教務部次長
	教 務 課 長
	総理工等事務部長
	同 教務課長

施設委員会

理 学 部	◎池川 信夫
	木村 泉
	永田 一清
工 学 部	後藤 和弘
	中条利一郎
	笹田 直
	片岡 昭雄
	◎長滝 重義
	道家 達将
大学院総合理工学研究科	森 勉
資源化学研究所	諸岡 良彦
精密工学研究所	林 輝
工業材料研究所	小池 迪夫
原子炉工学研究所	井関 孝善
共通科目	桐生 武夫
大学院理工学研究科教育会議	春山 志郎
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	白井 實
幹 事	経 理 部 長
	施 設 部 長
	理学部事務長
	工学部事務長
	総理工等事務部長
	原子炉研事務長

発明委員会

工 学 部 長	◎清水 二郎
工業材料研究所長	◎浜野 健也
理 学 部	池川 信夫
工 学 部	飯島 俊郎
	高橋 清
大学院総合理工学研究科	加藤 雅治
資源化学研究所	曾我 和雄
精密工学研究所	大槻 茂雄
工業材料研究所	中村 哲朗
原子炉工学研究所	河村 和孝
資源化学研究所	伊香輪恒男
事 務 局 長	白井 實
幹 事	経 理 部 長
	研究協力部長

研究委員会

理 学 部	比企 能夫 小尾 欣一 小林孝次郎
工 学 部	○谷口 雅男 辻井 重男 神尾 彰彦 白樫 高洋 滝口 克己 山崎 正勝
大学院総合理工学研究科	佐藤 彰一 山岬 裕之
資源化学研究所	曾我 和雄
精密工学研究所	中野 和夫
工業材料研究所	◎宗宮 重行
原子炉工学研究所	三神 尚
幹 事	研究協力部長

広報委員会

理 学 部	岡 睦雄 宮崎 栄三 本蔵 義守 奥居 徳昌 新山 浩雄 古田 勝久 石井 彰三 深海 隆恒 佐伯 泰樹 横山 正明 明畠 高司 橋本 弘信 山瀬 利博
工 学 部	◎神馬 敬 吉村 昌弘 関本 博 松本 浩之 増田 伸爾 吉見 吉昭 白井 實
大学院総合理工学研究科	
資源化学研究所	
精密工学研究所	
工業材料研究所	
原子炉工学研究所	
工学部	
研究・情報交流センター	
教 務 部 長	
事 務 局 長	
幹 事	研究協力部長

留学生委員会

理 学 部	高橋 渉 笹田 義夫 宮坂 啓象 塚田 忠夫 川崎順二郎 大澤 吉博 関根 松夫 上羽 貞行 菅野 恒雄 ◎柳澤 健 ○渡邊 隆 川嶋 至 沼澤 治治 吉見 吉昭
工 学 部	
大学院総合理工学研究科	
精密工学研究所	
理 学 部	
工 学 部	
教 務 部 長	
幹 事	教務部次長 教 務 課 長 厚 生 課 長 総理工等事務部長 同 教務課長

厚生補導委員会

理 学 部	野口潤次郎 吉田 弘 松尾陽太郎 梶内 俊夫 渋谷 寿一 田中 穂積 和田 章 ◎亀山 貞登 ○西川 治 一國 雅巳 吉沢 善男 芳川 泰久 谷口 汎邦 千葉 廉 阿部 光雄 藤江 学 鈴木 朝夫 吉見 吉昭
工 学 部	
大学院総合理工学研究科	
共 通 科 目	
類 連 絡 会 議 部	
理 学 部	
工 学 部	
精密工学研究所	
教 務 部 長	
幹 事	教務部次長 教 務 課 長 厚 生 課 長 理学部事務長 工学部事務長 総理工等事務部長 同 教務課長

一般教育等委員会

共 通 科 目	岡 睦雄 阿部 光雄 河野 長 徳永 宗雄 玉泉八州男 石井 源信 志賀 浩二 中村 栄一 春山 志郎 辻 二郎 後藤 尚久 青木 義次 和田 稔 佐藤 伸 ◎吉田 夏彦 ○永田 一清 吉見 吉昭
理 学 部	
工 学 部	
大学院総合理工学研究科	
原子炉工学研究所	
理学部・工学部共通科目 常任委員会委員長	
同 副 委 員 長	
教 務 部 長	
幹 事	教務部次長 教 務 課 長 理学部事務長 工学部事務長

附属図書館委員会

附 属 図 書 館 長	◎早川宗八郎
附属図書館長津田分館長	○小門 宏
理 学 部	坂井 典佑 正田 巧 本間 龍雄 山根 正之 岡畑 恵雄 宮内 敏雄 藤井 信生 日野 幹雄 江頭 淳夫 乾 正雄 佐藤 拓宋 菅野 道夫 吉田 弘 桑野 隆 森川 豊 丸山 一男 澤岡 昭 小澤 由行
工 学 部	
大学院総合理工学研究科	
共 通 科 目	
資源化学研究所	
精密工学研究所	
工業材料研究所	
原子炉工学研究所	
幹 事	附属図書館事務部長 同 整理課長 同 閲覧課長

創立百年記念事業実施委員会

学 長	◎松田 武彦
理 学 部 長	田中 郁三
工 学 部 長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長	田中 良平
資源化学研究所長	伊香輪恒男
精密工学研究所長	吉本 勇
工業材料研究所長	浜野 健也
原子炉工学研究所長	福富 博
附属図書館長	早川宗八郎
総合情報処理センター長	池邊 潤
教 務 部 長	吉見 吉昭
理 学 部	小口 武彦
工 学 部	本間 龍雄
	竹中 俊夫
	飯島 泰蔵
	平井 聖
大学院総合理工学研究科	岸 源也
	小林 啓美
	明畠 高司
工業材料研究所	黒正 清治
事務局 長	白井 實
幹 事	庶務部長
	経理部長
	施設部長
	研究協力部長
	教務部次長

組替えDNA実験安全委員会

組替えDNA実験安全主任者	◎野宗 嘉明
理 学 部	戸田不二緒
工 学 部	正田 誠
大学院総合理工学研究所	平本 幸男
原子炉工学研究所	戸田不二緒
研究委員会	明畠 高司
保健管理センター	岡本 眞實
事務局 長	曾我 和雄
大学院総合理工学研究科	榎本 稔
工 学 部	白井 實
	加藤 武
	道家 達将
幹 事	庶務部長
	施設部長
	研究協力部長

健康安全管理委員会

理 学 部 長	田中 郁三
工 学 部 長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長	田中 良平
資源化学研究所長	伊香輪恒男
精密工学研究所長	吉本 勇
工業材料研究所長	浜野 健也
原子炉工学研究所長	◎福富 博
工学部附属工業高等学校長	平井 聖
附属図書館長	早川宗八郎
総合情報処理センター長	池邊 潤
事務局 長	白井 實
保健管理センター所長	稲田 祐二
安全管理専門委員会委員長	未 定
エックス線障害防止専門委員会委員長	加藤 誠軌
幹 事	庶務部長
	経理部長
	施設部長
	研究協力部長
	総理工等事務部長

教育工学開発センター運営委員会

セ ン タ ー 長	◎森 政弘
セ ン タ ー 教 授	高野 綏
	清水 康敬
理 学 部 長	田中 郁三
工 学 部 長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長	田中 良平
附属図書館長	早川宗八郎
工学部附属工業高等学校長	平井 聖
科学教育研究室主事	坂元 昂
教 務 部 長	吉見 吉昭
事務局 長	白井 實
教 育 委 員 会	小泉 堯
研 究 委 員 会	辻井 重男
大 学 院 委 員 会	佐藤 拓宋
教 職 学 科 目	坂元 昂
共 通 科 目	玉泉八州男
理 学 部	永田 一清
工 学 部	森田矢次郎
	森川 陽
大学院総合理工学研究科	岸 源也
	平井 聖
	武者 利光
幹 事	工学部事務長

長津田地区整備計画委員会

大学院総合理工学研究科長	◎田中 良平
資源化学研究所長	◎伊香輪恒男
精密工学研究所長	吉本 勇
工業材料研究所長	浜野 健也
天然物化学研究施設長	野宗 嘉明
像情報工学研究施設長	辻内 順平
理 学 部 評 議 員	本間 龍雄
工 学 部 評 議 員	石川 延男
大学院総合理工学研究科評議員	明畠 高司
大学院総合理工学研究科	岸 源也
	大瀧 仁志
	林 國一
	武者 利光
	古川静二郎
	丹生慶四郎
資源化学研究所	山本 明夫
精密工学研究所	池上 皓三
工業材料研究所	黒正 清治
天然物化学研究施設	大島 泰郎
像情報工学研究施設	安居院 猛
附属図書館長	早川宗八郎
総合情報処理センター長	池邊 潤
研究・情報交流センター長	小林 啓美
総合研究館長	小林 啓美
大学院総合理工学研究科	明畠 高司
工 学 部	渡邊 隆
教 務 部 長	吉見 吉昭
事務局 長	白井 實
幹 事	庶務部長
	経理部長
	施設部長
	総理工事務部長
	附属図書館事務部長
	総理工等庶務課長
	同 経理課長
	同 教務課長
	理学部事務長
	工学部事務長
	総合情報処理センター事務長

国際学術交流委員会

理 学 部 長	田中 郁三
工 学 部 長	清水 二郎
大学院総合理工学研究科長	田中 良平
原子炉工学研究所長	福富 博
理 学 部	川久保達之
工 学 部	○内藤 喜之
	◎渡邊 隆
大学院総合理工学研究科	武者 利光
留学生委員会委員長	柳澤 健
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	白井 實
工 学 部	森川 陽
	森田矢次郎
	竹中 俊夫
資源化学研究所	大島 栄次
精密工学研究所	鈴木 朝夫
工業材料研究所	丸茂 文幸
幹 事	研究協力部長

留学生会館運営委員会

教 務 部 長	◎吉見 吉昭
留 学 生 委 員 会	柳澤 健
	渡邊 隆
厚生補導委員会	槐山 貞登
	西川 治
理 学 部	吉田 弘
工 学 部	森泉 豊栄
大学院総合理工学研究科	中島 正之
資源化学研究所	広瀬 千秋
留学生相談主事	森田矢次郎
	荒井 滋久
工 学 部	沼澤 治治
	原 芳男
	谷口 雅男
事 務 局 長	白井 實
幹 事	教務部次長 教務課長 厚生課長

総合情報処理センター運営委員会

セ ン タ ー 長	◎池邊 潤
セ ン タ ー 助 教 授	前野 年紀
理 学 部	木村 泉
	○小野 昱郎
工 学 部	福田 敦夫
	小川 浩平
	和田 章
	長松 昭男
大学院総合理工学研究科	布村 成具
資源化学研究所	仲 勇治
精密工学研究所	今井 聖
工業材料研究所	橋爪 弘雄
原子炉工学研究所	高木 隆三
教育委員会	小林 宏
研究委員会	小林孝次郎
附属図書館長	早川宗八郎
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	白井 實
幹 事	センター事務長

総合情報伝達システム運営委員会

理 学 部	宮崎 栄三
工 学 部	北原 和夫
	岡部平八郎
	早川 豊彦
	辻井 重男
	末松 安晴
大学院総合理工学研究科	笹田 義夫
	山崎陽太郎
資源化学研究所	石田 愈
精密工学研究所	上田 光宏
工業材料研究所	安田 栄一
原子炉工学研究所	服部 俊幸
附属図書館長	早川宗八郎
教育学開発センター長	森 政弘
総合情報処理センター長	池邊 潤
研究・情報交流センター長	小林 啓美
総合研究館長	小林 啓美
工 学 部	谷口 汎邦
大学院総合理工学研究科	◎岸 源也
精密工学研究所	伊賀 健一
教育学開発センター	清水 康敬
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	白井 實
幹 事	庶務部長 経理部長 施設部長 研究協力部長 教務部次長 総理工等事務部長

エックス線障害防止専門委員会

理 学 部	高柳 邦夫
工 学 部	島内 浩喬
	◎加藤 誠軌
	入戸野 修
	脇原 将孝
大学院総合理工学研究科	山崎陽太郎
資源化学研究所	森川 豊
精密工学研究所	鈴木 朝夫
工業材料研究所	森川日出貴
原子炉工学研究所	一守 俊寛
幹 事	研究協力課長

放射線障害予防委員会

理 学 部	旗野 嘉彦
工 学 部	綱島 滋
	岡部平八郎
	石井 彰三
大学院総合理工学研究科	橋本 弘信
原子炉工学研究所	高木 隆三
工業材料研究所	中村 哲朗
放射性同位元素実験室長	旗野 嘉彦
アイソトープトレーサー実験室長	明島 高司
大学院総合理工学研究科	小川 雅生
原子炉工学研究所	◎新井 栄一
	九山 忠司
保健管理センター所長	稲田 裕二
事 務 局 長	白井 實
幹 事	研究協力部長

安全管理実施委員会

健康安全管理委員会委員長	◎福富 博
理 学 部	桑嶋 功
工 学 部	高柳 邦夫
	大門 正機
	山本 經二
	田村 章義
	中瀬 明男
大学院総合理工学研究科	岡田 勲
	池田 光男
資源化学研究所	軽部 征夫
精密工学研究所	林 輝
工業材料研究所	田中 享二
原子炉工学研究所	高木 隆三

保健管理センター運営委員会

保健管理センター所長	◎稲田 祐二
セ ン タ ー 助 教 授	榎本 稔
	林 仁忠
理 学 部	岡 陸雄
工 学 部	吉川 昌範
	桐生 武夫
大学院総合理工学研究科	土肥 義治
精密工学研究所	若島 健司
学生相談室長	日野 太郎
教 務 部 長	吉見 吉昭
事 務 局 長	白井 實
幹 事	教務部次長 厚生課長

研究・情報交流センター運営委員会

センター長	◎小林 啓美
センター助教授	増田 伸爾
理学部	堀 素夫
	小島 政和
工学部	吉川 昌範
	◎谷口 雅男
大学院総合理工学研究科	吉田 裕
	瀬尾 和夫
	中野 文平
資源化学研究所	田附 重夫
精密工学研究所	奥島 基良
工業材料研究所	今井 久雄
原子炉工学研究所	河村 和孝
総合研究館長	小林 啓美
研究委員会委員長	宗宮 重行
事務局 長	白井 實
幹 事	研究協力部長 総理工等事務部長

総合研究館運営委員会

理学部	堀 素夫
工学部	小島 政和
	吉川 昌範
	◎谷口 雅男
	吉田 裕
大学院総合理工学研究科	瀬尾 和夫
	中野 文平
資源化学研究所	田附 重夫
精密工学研究所	奥島 基良
工業材料研究所	今井 久雄
原子炉工学研究所	河村 和孝
研究委員会委員長	宗宮 重行
総合研・究館長	◎小林 啓美
研究・情報交流センター助教授	増田 伸爾
事務局 長	白井 實
幹 事	総理工等事務部長 同 庶務課長 同 経理課長

極低温エネルギー実験センター運営委員会

センター長	◎比企 能夫
センター助教授	大塚美枝子
理学部長	田中 郁三
理学部	永田 一清
	小尾 欣一
工学部	佐藤 則明
	越後 亮三
大学院総合理工学研究科	塩田 進
	関根 松夫
工業材料研究所	阿竹 徹
資源化学研究所	鈴木 寛治
理学部	西田 信彦
事務局 長	白井 實
幹 事	理学部事務長

放射性同位元素実験室運営委員会

室 長	◎旗野 嘉彦
実験室放射線取扱主任者	◎丸山 忠司
	辻 正道
理学部	旗野 嘉彦
	武谷 汎
工学部	入戸野 修
	石井 彰三
大学院総合理工学研究科	岡田 勲
	小川 雅生
資源化学研究所	曾我 和雄
精密工学研究所	今井 聖
工業材料研究所	中村 哲朗
原子炉工学研究所	高木 隆三
幹 事	研究協力課長

総合情報処理センター

UNIX講習会のお知らせ

これからのオペレーティングシステムとして注目されているUNIXの講習会を次の通り開催します。

	開催日時	内 容
第1回 UNIX入門	6月24日(月) 13:30~16:30	UNIXの特徴, 歴史, 簡単な使い方, 文書処理, プログラミング
第2回 UNIXの使い方	7月1日(月) 13:30~15:30	Cシェル, エディタ, 電子メール, 電子ニュース, 機器の使い方
第3回 UNIXにおける 文書処理	7月8日(月) 13:30~15:30	Nroff/Troff, tbl, eqn, pic
第4回 UNIXにおける プログラミング	7月8日(月) 15:45~17:45	UNIX環境下での FORTRANの使い方, 言語仕様, ライブラリ など

総合情報処理センター休館の
お知らせ

省エネルギー期間に伴い, 次の通り休館します。

休館期間: 8月1日(木)~8月10日(土)

7月31日(水)は午後5時まで計算機サービスを行います。

【注】開催場所は長津田・総合研究館 1 階大研修室

◇叙 勲

昭和60年度の春の叙勲を受賞された本学関係者は次のとおりです。

山田 久夫 名誉教授 勲三等旭日中綬章

東京工大クロニクル No.180

昭和60年 6 月 20 日

東京工業大学広報委員会 発行©

東京都目黒区大岡山2-12-1 〒152

電話 03-726-1111 内線2032
